

18. 「災害を忘れない」ということ

東日本大震災だけではありませんが大災害が起きた時期になると、よくマスコミなどで聞く言葉です。直接の被害をこうむった方々にとって忘れることはありませんが、この言葉が気になります。なぜ、忘れてはいけないのかを考えることこそが、防災や減災への関心を継続させることになるからです。

この言葉で当時のことやその後について思い起こさせて、それを防災や減災へ、どうつなげるのか、そのアプローチが大事なことは言うまでもないのですが、単なる記念日的な感覚になってしまっただけでは意味がありません。自然現象自体は抑止も抑制もできませんが、自然災害を抑制することはできます。というのは、我々の暮らし方が関係しているからです。例えば地球温暖化が自然現象の発生に影響したり、我々の土地利用、自然との共生度が被害の大きさに関係していることが考えられます。「忘れるな」をどう生かすのか、自然災害は繰り返されるので、これまでの経験を活かして、暮らし方を修正しなければならないのかもしれないかもしれません。しかし、自然災害は困ったこと、悪であることにとどまるのであれば、何らの対策にもならないし、逆に主体性を失うことになってしまうことにもなりかねません。

また、忘れることで、同じような被害が発生しますので、記憶しておいてくださいという視点もあります。これを納得する、納得させるには高度な専門的な知識やこれまでの経験を分析評価することが必要となると思います。なぜなら、記憶するだけでは次の展開がないからです。これには相当な説得力と、継続させるプログラムが必要になると思います。そして、一番にこのスローガンが機能するには、忘れないことで便益があります、お得ですということをアピールする必要があります。何が得なのかを理解してもらうことが基本とはなりますが、忘れないということによってこれからの暮らしに役に立つことを実感できることを示すことです。これまでの経験が新たな知見となって、より快適で安全な生活環境になりますということです。

「災害を忘れない」ということを活かすには、忘れようがないというような感覚を持つ必要があります。それには自然災害がどのような素因と誘因で起きるのかを、地域知をベースにして理解する努力をする必要があります。災害列島に暮らしている限りは、この災害列島の特性について、学校教育をはじめ、地域知を醸成しながらあらゆる機会や場で学ぶことが大事だと思います。「災害を忘れるな」とは、忘れてはいけない理由があるということであり、その根拠を考え続けることでもあるのかもしれない。